おかやまアーツフェスティバル２０２５

岡山市民の文芸

第57回岡山市民文芸祭受賞作品

一般の部

【現代詩】

◎岡山市長賞

無二の友

山本照子

ワープロの蓋を開けて
人差し指でキーボードを押す
画面いっぱいが
朝の日差しを浴びた湖面のように
まっさらな光を放つ
キーボードを押す私の指はその光に向かって
言葉を投げかける

かって私の胸には
様々な想いがあふれていた
あふれた想いは
ひとりごとにさえなった
でも吃音症の私はそれらの想いを
誰にもうまく伝えられない
指がふるえる私は字を書くのも苦手だ

二十三年前ワープロを買い求めた
人指し指一本だけで
言葉が画面に着地するという不思議
人指し指一本だけで
一度吐いた言葉を飲み込めると言う奇跡

歳月を重ねていくうちに
ワープロは無二の友となった
画面の奥深くで水をたたえている湖は
私の思いの丈を抱き取ってくれる
月を浮かべた湖面は
私の言葉を一編の詩にさえ変えてくれる

ふと長年の友を想う
彼女の美しい指が編み上げたセーターは
今も私の心身をふんわりと包んでくれている
友が編んだセーターのように
誰かの心を包み込むことができたなら
それだけを願って
カタコトのように拙い文章を
時折新聞に投稿する

私は今日もワープロの蓋を開ける
無二の友と私の命を慈しむために

◇岡山市教育委員会教育長賞

大丈夫だよ

矢吹　めぐみ

「多発性硬化症です　難病です」
主治医は厳かに告知した
タハツセイコウカショウデス
ナンビョウデス
ぼんやりした頭の中に鳴り響く
お経みたいだな
その日から　私は　難病患者になった

「今まで先生なんて仕事　よくやってたな」
検査結果を見ながら
主治医は小さく呟いた
そうなんです　先生だけど
私　しんどかったんです
うまく歩けないし　くたくたに疲れるし
気合で乗り切れると思ってて　先生だから
泣き言も言えなかった
でも
身体は正直に
ＳＯＳを出したのだ

「やれば出来る」
多くの子ども達にそう言ってきたけれど
やっても出来ない人もいる
やっても出来ない時もある
私は
子ども達を励ましてきたつもりだったけれど
救いのない呪いをかけてきたのかもしれない

「大丈夫だよ」
窓から入る五月の風と光は
出来る私も
出来ない私も
柔かく　あたたかく
抱きしめてくれる

◇岡山市教育委員会教育長賞

まるとしかく

横山朋子

白い壁の教室はお豆腐を内側から見ているかのよう
自席より窓の外を見れば
きらきらと緑の木の葉が夏の風に揺れている

教室は大きな四角の学校の中にあって
学校は真っすぐな地面の上に建っている
しかし、真っすぐのように見える地面は実は大地の上にあり
大地は地球につながっている
地球は丸い
円周率はいつまでたっても終わりがない
窮屈な自席でふとそんなことを考える

真っ白の角砂糖のような人間になれたならこの場では大正解だろう
だけど外の世界は違う
お豆腐みたいな教室はきっと世界のごく一部にすぎない
世の中には良いことも悪いこともたくさんあって
人生の先はやすやすとは見えない
地球が丸くて良かった
割り切れず丸いからこそ未来への
新しい可能性を信じることができるのだから

◇岡山市教育委員会教育長賞

心のシャッターを切る

岡　由美子

父母の眠る山をあとにする
うっすらと　雪の薄衣をまとう道
ハンドルを切るたび　ひとつの記憶が甦る

無性に　あの池に会いたくなった

人里離れた　谷奥に
昭和に手掘りした　村で一番大きなため池
子ども達は　その周りに
基地を　夢を　秘密を　いくつも重ねていた

坂を上り切ると
瑠璃色が　ぱっと広がる
冬空を映す水面
鳥のさえずり
谷へとこぼれ落ちる水の音
どれも　五十年の奥からやってくる

あのころ
水はまだ　村人と対話していた
山は　子供の顔を覚えていた
若葉萌える山での　蕨折り
蜆を拾う　冷たい谷川の感触
池干しの日の　泥に沈む太陽
秋草の中にまぎれた　見えない約束
冬山で拾った　薪

自然と人とが
確かに　言葉を交わしていた時代
今　沈黙の中で
その声が聞こえる気がする

突然の訪問者に
何も問わず
やさしく抱いてくれる　池
静かにほほ笑みかける　山

心のシャッターを切る
この一瞬を
永遠に焼き付けたくて

◇岡山市教育委員会教育長賞

何処（どこ）へ

高山秋津

大きな一呼吸
最後の一呼吸を残して
母は　去った
かなしみが身体を貫き
だんだん自分が
空っぽになっていくのが分かった
そんなわたしの前に　暫くして
優しく降りて来たものがある
母の影だ
誰もいない曲がり角の静けさに
ひとり立っている母の姿が見えた
年月を脱いで
少しはにかみながら
微笑んでいるようだった

見えない力に引かれていく母の後ろ姿
すうっと胸に落ちてきたのは
母は帰って行ったのだという
安堵にも似た思いだ

では　何処（どこ）へ――

今
数羽の鳥が
夕空へ吸い込まれるように消えていった
いきものが向かう先
測ることのできない行き先
少しの怯えと少しの期待が
そこには　あるだろうか
母も　この鳥たちも
きっと同じ場所へ向かうのだろう
それは　大きく温かい手に導かれて進む
一本の道なのかもしれない
生き生かされている己の
遠く視線の先に伸びた道だ

きょうを折り畳んだ数羽の鳥が
渡って来る
わたしの裡へと続く空へ

【短　歌】

◎岡山市長賞

朝風のゆるく流れて空蒼し石の地蔵に道を尋ねむ　大西貫也

◇岡山市教育委員会教育長賞

母百寿薫る青葉の風となり星星めぐる旅にたたなむ　貝畑信行

岡山空襲　親戚へ

黒い雨蒲団をかぶり妹（いも）背負い線路づたいに吉備津へ走る　松元慶子

砂を食べ叫びを上げるガザの子に目を合わせられず口がざらつく　柴田真理

電子化に順応できぬ生きものは自然に寄り添い時間を紡ぐ　柾木加代子

【俳　句】

◎岡山市長賞

売られゆく牛の瞳や花の冷え　高木幸子

◇岡山市教育委員会教育長賞

独身（ひとりみ）の鍵穴照らし蛍の夜　中林さつき

遠雷や昭和生まれの臍力　今井淳子

くたくたのハンカチにある物語　小西邦子

終戦日五右衛門風呂にくべる黙　須藤暁子

【川　柳】

◎岡山市長賞

思い出を美化し夫婦の日向ぼこ　市田鶴邨

◇岡山市教育委員会教育長賞

消しゴムの余情感なき消去キー　西尾照常

夢のある花樹は無風を好まない　長島恵美子

抱えるか抱えられるか五分と五分　船越洋之

滔々と新子掬ひし吉井川　今井淳子

【随　筆】

◎岡山市長賞

令和・新米姑は困惑する

實近裕美

「結婚しようと思っとるから今度彼女、連れて来るわ」
息子からのその言葉に、私の頭の中で打ち上げ花火が上がった。もちろん幸せ色の花火だ。人間関係が難しい現代でよくぞ伴侶を見つけた。偉いぞ息子。しかし私は浮かれた頭を悟られないように平静を装って返事をした。
「そう、おめでとう。楽しみにしとくわ」
それからしばらくして息子と彼女さんと一緒に楽しい会食をすることが出来た。令和七年春、新米姑となる私は後に令和の嫁姑について翻弄される事になるのだ。
自慢になってしまうのだが、息子の彼女さんはとてもしっかりしている可愛い人だ。緊張しながらも気を使って一生懸命話をしてくれているのが分かった。この可愛らしいお嬢さんが息子のお嫁さんになるんだと思うと、心臓がキュッとした。心臓の病気ではない。ときめきのようなキュッだ。私もこのお嬢さんとの関係を大切にしていきたいと思った。でも大切に、とはどうすればいいんだろう。個人の価値観が大きく違う現代で、独りよがりに自分の気持ちをぶつけるのはよくないだろう。令和のお嫁さんたちにとって良い姑とはいかなるものか。私はパソコンを開いた。『令和嫁姑』と検索。インターネットは色んな世代の話を見ることが出来て、とても便利だ。令和のお嫁さんたちの意見を覗いてみる。
『アポなしで家に来るのはやめてほしい』

なるほど、連絡なしで家に行っちゃだめという事か。突然行くのはいくら身内でもあまりよくないだろう。
『義母から大量の野菜が送られて困る』
困る？　私ならうれしいけど。食べきれないならご近所さんにおすそ分けすればいいんだから。しかし若い世代はご近所付き合いがあまりないのかもしれない。なるほど。
『義母からいつも褒められてばかりでプレッシャーを感じる』
これダメなの？　褒められたら嬉しいでしょ。これはどうしたことか、読めば読むほどだんだん自信がなくなってくる。思いがけない厳しい意見も多く、私は困惑した。どうしよう嫁姑は仲良く出来ないんだろうか。しかし別の記事にはこんな統計も出ていた。
『約半数のお嫁さんと姑さんは仲良し』
そうか、読んでいたのはあくまでも他人の意見。結局は人間関係は自分と相手。大切に思う心を持って、少しずつ距離を縮めていくしかないんだろう。頑張り過ぎないように頑張ろう。私は自分の中でそう結論をつけて、ようやく心が落ち着いた。
それからしばらくたったある日、息子から連絡が来た。
「赤ちゃんが出来たよ」
私の頭の中で幸せの大玉花火が上がった。部屋の中でひとしきり小躍りした後ハッとした。
そしてパソコンの前に座って『令和孫との関係』と検索。またしばらく私の困惑は続きそうである。

◇岡山市教育委員会教育長賞

リポーター

栗原由美

「おーい、夕焼けが出とるぞ」
勝手口を覗いて、夫が言った。
「うっそー」と私は、握っていた包丁を携帯電話に替えて、外へ飛び出した。西の空に、周囲の雲を黄金色に染めて、今まさに陽が沈もうとしている。カメラを起動させ、なるべく近隣の住居など入らないように、フレームを合わせる。ピンチアウト、インを繰り返しながら、私は何枚もその夕景を撮る。忙しい家事の合間を縫って、その中の一番納得のいく一枚を選び送信する。それが、今の私の日々のスタイルとなっている。
一年前、友人に勧められて、天気予報アプリをダウンロードした。天気情報はもちろん、今日は何の日なのか、季節の節目節目の事柄など、歳時記のような役目もしてくれる。そして何より楽しみなのが、リポーターとして参加できることだ。
「周辺の空」「自然・季節」「ライフスタイル」などのカテゴリーに合わせて、写真を送信する。夕景の写真は「夕焼け」へと送った。周辺の夕焼けの空が、リポーターたちの写真で埋まる。似たような空もあれば、地域や場所によって、まるで違ったりもする。我が家は北を除き、山が迫っているため、どうしても視野が狭くなってしまう。それでも送信には意味がある。必ず現在の天気情報を入力するので、役立っているのだと思う。
朝は四時過ぎには目が覚める。冬だとまっ暗だが、夏はこの頃から空が白み始める。東の空には金星が光り、山の稜線がほんのりピンク色に染まりかける。夜を残した空は、ブルーモーメントと呼ばれる美しい現象を見せてくれる。一度出合ったら、明日も見たいが重なって、厳寒の朝も、私は東の空を眺めている。刻一刻と変わる空の色を、これほどまでに、かつて見たことがあるだろうか。
雲の形も変わる。入道雲が湧き上がる夏、鰯雲が広がる秋。ふわふわと浮かぶ綿雲の春、雪を降らせる冬の雲。この一年、たくさんの雲の形を見てきた。鳥に見えたり、龍や鯨に見たてて面白がった。撮った写真から見えたものもあった。どんよりした雲の膨らみの中に、父の顔を見つけた時は、鳥肌が立った。姉たちも口を揃えて「お父さんに違いない」と言った。やはり空の上から見守ってくれているんだと、偶然だとしても嬉しかった。
飽き症の私のこと、数ヵ月で辞めてしまうだろうと思っていた。父の雲を見てから、ますますのめり込んでしまったようだ。雨の日も、花から落ちそうで落ちない雫を撮る。アップで見ると、雑草さえこんなかわいい花だったのかと、気づかされる。上を見ているかと思えば、地面に這いつくばっている。
「あそこの嫁さんは、とうとう狂ったかと言ってるかもしれんなあ」と、夫に言うと、
「そうかもしれん」と、ただ笑っている。
「なんか空が変じゃ、半分晴れで半分雨じゃ」
今度は息子が知らせに来る。どうやら家族を巻き込んで、リポート生活二年目突入。

◇岡山市教育委員会教育長賞

手づくり歌集

室　常子

私の母は、女学校時代から八十六歳で亡くなるまで約七十年間こつこつと短歌（うた）を詠んだ。そんな母を見て育ち、私もいつしか詠むようになった。結婚後、子育て・パート勤めなどで中断した時期もあったが、公民館の短歌講座で学び、時折新聞歌壇に投稿してきた。よき師、よき友に恵まれ月一回の教室はとても楽しかった。

しかし年を経るごとに高齢の友が一人二人とやめてゆき、最後はたった四人となり、一昨年講座を閉じた。以後は一人で細々と詠んでいたが八十路に入った頃から言葉が浮かんで来なくなり、作る短歌の数がめっきり減った。物事に対する感動が少なくなったような気がする。このあたりが私の限界かなと思えてきた。

悶悶とする日々を送っていたある日、幼なじみのMさんから手づくり句集が送られてきた。Mさんの俳句歴は長く、新聞俳壇の上位に入選したこともある人だ。娘さんから、長年取り組んだ証（あかし）を残すために句集を作ることを勧められたそうである。

ボールペンで手書きし、どの頁にも自分で描いた花の絵が添えられていた。カラーコピーで仕上げたそうである。彼女の人柄がにじみ出た数々の句、美しい花の絵、手づくりならではの温かさがあふれていた。感動した。

彼女の句集をめくりながら、「私も手づくり歌集を作ってみよう」という思いが湧いてきた。以前友人から「そろそろ歌集を出したらいかがですか」と言われたことがあった。

「とんでもない。私の下手な短歌などはずかしくて歌集になどできません」と答えたことがあった。

出版社に頼まなくてもこんな立派な句集ができるのだと感心し、私も挑戦しようと思った。早速古いノートから短歌を選びだす作業にとりかかった。三十数年分の中、平成八年から令和七年まで、一年間に四首ずつ選び、筆ペンで書いた。

選んだ短歌を読んでみると夫、子供たち、父母、兄弟、義母などを詠んだものが多く自然詠は少なかった。我が家の歴史が見えてきて、自分史にもなると思えた。所々に型染めの手法で絵を入れた。作業した時期は庭の紫陽花が満開、また選んだ百首の中に紫陽花を詠んだ短歌を二首入れたので題を『歌集　紫陽花』とした。とりあえず十冊分をコピーした。パンチで穴を開け、リボンで結び仕上げた。

母は長年の努力を形にすることなく逝ってしまったが、私はこうしてささやかながらも歌集としてまとめ、「自分の足跡」を残すことができた。子供や孫たちが読んでくれたら幸いである。でき上った歌集は一冊、二冊と友人、知人、お世話になった方へ差し上げて残り少なくなった。

歌集づくりのきっかけを下さったMさん、ありがとうございました。

◇岡山市教育委員会教育長賞

笑顔

玉　上　由美子

七月二十七日。

早朝の我が家の台所に携帯電話の着信音が響いた。私は、ゴーヤチャンプルーを作成中の手を止めて、慌てて携帯電話を耳に当てた。

「明日と明後日なら空いてるんじゃけどな。どうするかな」

毎年十一月に庭の植木の剪定をして下さっている馴染みの植木屋さんからだった。

「わあ、良かった。お願いします。まるで庭がジャングルみたいなんです」

しかし何といっても猛暑日が続いている今。お願いしますとは言ったものの、テレビのニュース番組の中で、熱中症対策を万全に、というフレーズが毎日のように流れている日々である。外の仕事など出来るのだろうか。心配である。

「昼間の暑い時間は仕事は休ませてもらう」

植木屋さんは言った。

体調を見ながら、暑さを見ながらの作業が始まった。少しずつ作業は進んでいく。

我が家の庭の木々は、義母が好み、植えたものがほとんどである。木の一本一本に義母の思いが詰まっている。

まず、家のぐるりを囲い、垣根となっているバベの木。短く真っ直ぐに刈り取られた。伸び放題だったバベの変化に義母も喜んでいることだろう。次に、月日を経て存在感一杯に庭に構えているキンモクセイ。これもまた、暴れていた枝や尖った葉が丁寧に整えられた。

我が家と共にもう五十年以上も一緒に生き続けているツゲ。ツタに絡まれ、黄変していた葉は短く丸くまとめられた。また、義母が亡くなる前にどうしてもと植えられたハナミズキは、好き放題に伸び切った枝が切り落とされて、さっぱりと涼やかに立っている。立ち姿はどことなくハンサムである。

二本のツバキもある。小ぶりの紅い花を咲かすワビスケ。要らない枝がカットされ、ちょこんと座っている。もう一本は、冬の冷たい空気の中、毎年、ピンクの花を華やかに咲かして私達を楽しませてくれている立派に成長したツバキ。大きくはみ出していた枝が見事に整理されている。

花の咲いた後、私に放っておかれたアジサイやボタン、ジンチョウゲ。美味しい実を提供してくれた後、これまた放っておかれたキンカン。樹形が整えられて美しい姿になった。

専門職としての植木屋さんの働きぶり。本当に有り難いことである。感謝の言葉しか出てこない。

剪定が最後の日。甘い桃の缶ジュースを持っていった。

「おお、おお、いいものをありがとう」

汗にまみれ、ドロドロになっている植木屋さんの顔が大きな笑顔になった。ジュースが喉を通り抜ける音が聞こえる。

無事に終わって本当に良かった。暑い日々だった。心からほっとした。

植木屋さんから貰った笑顔。汗の中の笑顔。私は幸せの中にいた。

◇岡山市教育委員会教育長賞

河川敷で燃えろ

斉藤もも

夫の転勤で岡山に引っ越してきて、私のスピードが少し変わった。

二八歳、大きな病気も怪我もせず、ここまで育ってきたけれど、私は自転車に乗れない。

子どもの頃、「女の子なんだから」という理由で親からチャリンコ禁止令が出されて、そういうものかと思って過ごしていた。親元にいる間は両親が送り迎えをしてくれていたため、移動に困ることはなかった。また、地元を離れて福岡県で暮らし始めてからも、公共交通機関が発達していたおかげで、不便を感じることはなかった。しかし、岡山県で暮らすことになって、ついに移動手段で困ることになった。いや、もちろん、新幹線もバスも、路面電車だってあるけれど、岡山はかなりの車社会なんですよね。

自動車免許は持っているけど、ペーパードライバー。ていうか、自家用車を持っていない。そんなわけで、日常生活に支障が出るようになってしまった。

それでも、まあ徒歩でなんとかなるし、と車輪回避の方向で足掻いてはみたのだけれど、夫に相談して、言われた一言が効いた。

「ここで乗らなかったら、一生乗らないままになると思うよ」

――思えば、できないことからは徹底的に逃げてきた人生だった。ここらが年貢の納め時なのかもしれない。

観念して、自転車に乗る練習をすることにした。特訓だ。特訓といえば河川敷、家の近くにある旭川に夫を連れて赴いた。地面の「燃えろ岡山」の文字に励まされつつ、サドルの高さを調整して私はペダルを漕ぎ出した。

えっ、と思った。なんと、前に進むことができたのだ。不安定さはあるものの、転ばない。自転車って、漕ぎ続けたら転ばないんだ…！　私にとっては偉大な発見だった。

逃げずにさっさと乗ってみれば良かったのだ。どんなことでも挑戦してみれば、案外上手くいくのかもしれない。

河川敷の優しい真っ平なコースが、そんな前向きな気持ちを後押ししてくれた。踏めば踏むほど、スピードが出て遠くへ行ける。気づけば、夫の姿が見えなくなるほど、長い距離を走っていた。

往復して戻ると、近くのベンチに座って待っていてくれた夫が

「乗れてるじゃん」

と言った。照れくさくて、へへっと笑いかけた。

初めての二輪は、風とスピードという新たな喜びを私に教えてくれた。後日、図書館に自転車で行ってみた。徒歩で通っていた時より、圧倒的に早い！　時間を節約できたという実感に、胸がドキドキした。

自分が変わると、世界が変わって見える。次は、車に乗れるようにペーパードライバー講習を受けてみたい。この移住を機に楽しいことがたくさん待っている気がしている。岡山で燃えていきたい。